

## 論文をまとめるにあたって

日本診療録管理学会会誌 編集委員  
藤田保健衛生大学短期大学 原 臣 司

### I. 論文を書く上での注意点

#### 1. まえがき

診療情報管理士の皆さんは、日ごろの業務を確実に遂行することが最も大切であり、研究に費やす時間的余裕が十分あるとは思えない。業務の一環として行った事例調査やシステム構築などについて学会発表を行う程度が努力の限界と考える人も多いだろう。しかし診療情報管理士はすべての患者さんの情報に最も近い位置にあり、それなりの工夫と努力を継続すれば、立派な研究が行えるに違いない。

「理想と現実とは違う」という言葉が聞こえてきそうであるが、短期間であっても目的を明確にしてデータを収集し、考察すれば、論文としてまとめることができると思う。練習のつもりで気軽に調査・研究を始め、学会発表と論文への取りまとめを行ってみてはどうだろうか。以下に論文を書き始めるにあたって注意しなければならない初歩的な点についてまとめた。また論文を書く際の「倫理的側面からの注意点」と論文査読で遭遇したいくつかの例を上げて「文章を書く上での注意点」とをまとめ、別項に示した。

#### 2. 分かりやすい論文を書こう

論文は実際に行ったことをまとめて文章化すればよいものではない。読者に対してわかりやすいことが第一である。そのためにはいくつかの工夫が必要である。

##### 1) 誰に読んでもらうために書くか

まず始めにどのような人を対象に論文をまとめるかを明確にしなければならない。どの程度の詳しい事柄から説き起こせば良いかは、読者の専門や知

識・学力レベルなどによって変わる。読者を想定し、分かりきったことをくどくどと説明することは避け、必要最小限の言葉で、話の筋道を論理的に明確に説明する。換言すれば論理的な流れを大切にすることである。より詳しい説明が必要と感じた場合には、補足的に欄外や巻末に記載するのもよい。

##### 2) 論理の流れを大切にしよう

上に述べた「論理的流れ」とは何かというと、一つには論文の形式を重んずることである。論文の構成の骨子は、一般的には「研究の背景または目的」、「本論」、「まとめ」からなる。本論の内容は研究の範疇、すなわち「理論的なもの」、「理論と実験の照合」、「新しい実験手法やシステムの開発」などにより異なる。一般的流れは、調査や実験などの「方法」、調査研究の目的に沿って得られた「結果」、「考察」、「結論」の順に記載する。また新しいシステムの開発などの場合には、従来システムの問題点などに対する解決の基本的考え方、工夫した点、新システムの概要、運用経過、運用結果、システムの目標や狙いと結果との食い違い、結論となるだろう。すべての論文をこの形式で記述しなければならない訳ではなく、基本的な論文構成に従っていればよい。

論文の骨子に先立って、研究の概要を記述したアブストラクト（要約）をのせ、また論文の最後には、謝辞と参考文献をのせるのが一般的である。しっかりした論文を書くには、関連する研究分野で活躍する、優れた人の論文をたくさん読み、形式を真似ることが有効である。

##### 3) こんな点に注意しよう

はじめて論文を書く際に注意すべき重要な点を以下に述べる。

第一に、「研究論文」は「研究経過の説明ではない」

ことである。読者に訴えることを明確にして書き出す必要がある。一言でいえば、経過の羅列を絶対にしてはならない。研究の目的を達成する際には回り道や失敗は必ず付随する。また関連する事柄や技術を勉強するために多くの時間を費やすこともある。しかし、そこで得られたことが研究の本筋とどのような関係にあるかを十分考えて、時間を掛けて行った結果であっても、必ずしも記載するに値しない事柄も多い。それらを思い切って捨てる勇気をもつことも必要である。

第二に、上述したことと関係するが、論旨を明確にするために、記述される内容は、行った順序と無関係に前後が入れ替わっていてもよい。後から補足的にと思って行った調査や実験が、研究の本質に関係している事が判明し、あたかも初めから計画して行ったようにまとめることがあってもよい。要するにどのように表現すれば読者にとって分かりやすいかを追求すべきである。

第三に、2.1で書いた内容と反対のことを述べるようではあるが、論旨を明確にするために必要なことを省略してはならない。長い間一つの業務に携わっていると、自分には分かりきったことが増えて、文章を書き進めるうちに時として省略してしまい、論旨が繋がっていなくなったり、読者に意味が読み取れない事態に陥ることがある。これを避けるためには、自分で書いた論文あるいは文章を、2、3日間、日をおいて第三者の目で読み直してみることが肝要である。その際、論理的な観点から必要なことが抜けていないか、読者に成り代わって注意深く読み、不足している分を補う気持ちが大切である。

第四に、文章の書き方について注意しなければならない最も大切なことは長文を避けることである。特に日本語では接続助詞として”が”を多用する傾向にあるが(この”が”がここで言う接続助詞に対応する)、用法があいまいな場合が多いので注意する必要がある。「必要なとき意外に”が”は使わない」と心に決めて文章を書くようにするのもよい。

考えている内容を文章にうまく表現できない場合が時々ある。こうした時の解決方法としては、書きたいことや言いたいことを、頭に浮かぶままに短文として羅列してみることを薦める。自分は何を言いたいのか、言いたくなかったきっかけは何か、ほかの表現方法はないか、など考えながら、関連する短文

をいくつも作る。そしてそれらの短文を眺めながら、自分の言いたいことが表現できるように、複数の短文を繋ぎ、ときには順序を入れ替え、追加・削除などの作業を続けて、少し長い文章にしてゆく。10分間もこの作業を続けると見違えるようなわかりやすい文章ができあがるはずである。

### 3. あとがき

論文を書くときの大まかな注意点を述べた。本論をまとめるための注意点まで述べていないが、論文をまとめる際の参考になれば幸いである。論文は下書きに10日、清書に5日と言われている。みなさんの奮闘を期待している。

## II. 具体的な注意点

### 1. 倫理的側面からの注意点

- 1) 論文等の発表に当たっては、所属する施設・機関などの相応する「長(病院長や医事課長など)」の承諾、発表の許可などを前もって得ておくことが大切である。
- 2) 論文等の連名者の選定に当たっては、論文に関連する調査・研究に直接的あるいは間接的に関係したすべての人を含めて熟慮し、厳選するように注意していただきたい。特にグループで行った調査研究などにおいては、全員を連名者にできない場合が多いので、その論文に関わる調査研究はどのような背景で行われ、どのような人たちが関係していたか明記し、関係者に敬意を表すべきであろう。後々関係者から異論が出ないように留意しなければならない。
- 3) 使用する図表類は原則オリジナルなものでなければならない。他の論文・雑誌・研究会資料等から引用するときは、当該資料を参考文献としてあげ、本文中に参考文献番号を上つき文字で表示し、引用箇所を明示することを忘れてはならない。

### 2. 文章を書く上での注意点

- 1) 図番の位置は文頭であってほしい。図番号が長文の最後に来ている文章を見かけるが、非常に読みにくい。図面を見てから文章を読むのと読み進んで最後に図面があるのと、どちらがよいか考えれば明らかである。図面を見ながら文章を

読む方がずっと理解しやすい。文章は読む人の身になって書くことが原則であり、図番号は文頭におき、「図1に示すように」などとするのがよい。

- 2) 論文の中で使用する用語について、一つの内容は同一の用語で通すことが肝要である。「成果」と「アウトカム」、「業務」と「診療情報管理業務」、「基本情報」と「入院基本情報」、「病歴システム」と「病歴管理システム」、「統計集」と「院内統計集」など同じ意味で使用しているのか、別な言葉で別な意味を表現しようとしているのか不明確な場合が多々ある。読者を惑わせることを避けるために、論文中に使用する用語の統一には十分に注意を払ってほしい。
- 3) 「私たちは」など主語を書いている論文も見受けられる。論文において主語は執筆者であることが自明なので書かないのが通例である。「わたしは…したい」、「私自身が…考察した」などは「…する」、「…について考察した」でよい。また「考える。」という文末を良く見かけるが、これも不要である。なぜなら論文はすべて著者が考えている結果の報告だからである。したがって「…が必要であると考える。」は「…が必要である。」とするだけで必要十分である。
- 4) 本来文章にしなければならない内容を箇条書きにしている例がある。同列の事柄や短文が多数あって文章中に埋め込むと判りにくい場合など、

箇条書きにすることにより、内容が理解しやすくなる場合に限り使用するようにしたい。文章全体または大部分を箇条書きにすることなどは避けなければならない。

- 5) 代名詞の「その」の意味が読み取れないことが多い。「そのシステム」の「その」がどれを指すのか不明確で、文意が読み取れないことがある。指すものが明白な場合に限り「その」を使用し、判明し難い場合にはその都度、該当する名詞を使うようにしたい。
- 6) 「では、現状ではどのようになっているのだろうか」など疑問を投げかける文章を見かける。一般的な雑誌ではこのような「問いかけ」も読者に問題意識を持たせる上で効果的な場合がある。しかし論文では使用しない方がよい。それは本来疑問な点を明らかにするために調査・研究を行い、その結果を論文としてまとめているからである。

以上、この3年間、編集委員として皆さんの論文を査読している中で感じたことを、比較的よく出会う例を挙げながら、文章作成上の注意点としてまとめた。他の編集委員は別な見地から注意すべき点を指摘されるかもしれないので、これで十分とはいえないが、論文を書く際の参考にしていただければ幸いである。